

草庵仏教

第240号
(発行日)

2010年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○ 聖典共学会――毎月6日。
午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

与えられていた場所

誰もが知ってるウサギとカメのかけつこの童話で、ウサギは早くカメは遅い。当然勝

てると安心したウサギはゴール前で一眠りして油断したため、後から来たカメに追い抜かれたという例の話である。

この話ではカメが勝ったことになっていくが、現実にはほとんどウサギが勝ちカメは負ける。今日のような競争社会では知能が高く能力や素質

の豊かな人が勝ち、そうでない人は負ける。しかも勝ち組は少なく、負け組は多い。

しかるにカメは「いつかは追いつける、追い抜ける」と未来に期待しつつ年月を過ごす

すが、いつまでたっても差は縮まらないばかりか広がる一方である。自分の能力の乏しさを嘆きつつ、しかもなお「

がんばれば、なんとかなる」という淡い期待と、自分より優れた人への憧れや羨望や嫉妬の思いを抱きつつ、年月を送る。周りからも「がんばれ、

努力が足りないから駄目なの

だ、もっと努力せよ」と励まされる。

そのうちカメは所詮カメであってウサギにはなれないという悲哀が強くなっていく。

けれども、あきらめずにがんばる姿勢がこの世では賞讃される。しかし、本人は現実

の自分の素質の乏しさに嫌悪すら感じ、どうにもならないわが身の現実に不足とやりきれなさが残るばかりである。

競争社会であり格差社会であるこの世を生きる多くの人たちが、こういう期待と嘆きの

中間に宙ぶらりんのまま人生を送ってしまうことが多いのではないか。

なぜに私は能力も素質も性格も貧弱であり、粗悪なのだろうかという嘆きが起きる。

ろうかという嘆きが起きる。実際私など、語学能力一つをと

っても、自国語の日本語がや

つと使えるだけで、英語は長い間習ったが身に付いていない。文章を作ることはおろ

か、簡単な日常会話もほとんどできぬ。それに比して、たとえば井筒俊彦氏のよう

に二十カ国語を読んで書けるといいう天才もいる。

あるいはマザーテレサのように困窮せる人々にわが身を捨てて奉仕するよう

な尊い人生を生きる人もいれば、自分や家族の生活を安定させるこ

とだけで精一杯の者もいる。どうしてこうも違うのかと嘆かざるを得ない。

それは偶然にそうなったのであり、それぞれの人の運命

だから、仕方がないとよくいわれるが、人間は平等といわれながらも、あまりにも不平等であり不条理である。

また、世界と人間を神が創造したのなら、どうして人

の性質や素質の差があるのだろうか。神はあまりにも不公平ではないかとの疑問が残る。

仏教では、「どうして人間は」という問いを、さらに主体的に問うて「どうして私は

こんなにも能力も素質も人格性も貧弱でありお粗末なのか」と苦悩を抱えて問う人に

対して、「それはあなたの宿業のゆえなのだよ」と教えられて

いる。宿業とは過去の己の行いのことであり、この世に生まれる前(過去世)からの私の行いの

結果が現在に報い現れて、私の能力や素質や心の性質にな

っている。仏教は自分自身の苦しみを問題として、仏の教えを聞く

人に対して説かれていく教法であって、ことに宿業の教えなどは自己自身の問題(苦悩)

を離れて、他者の境遇とか世の中の状態を説明したり評価

するための思想ではない。そうすると、自分の内的な

素質や性格や才能などが、単に偶然とか運命でそうなので

はなく、また神の創造のわざでもなくて、「あなたの過去の

の行いの集積が現在のあなたの内容となって結果している」と聞かされる宿業の教え

は、私には「そうなんだな、過去の私の行為の集積の結果

で、この世での違いが出てくるのだなあ」と、神の創造とか偶然なる運命というよう

な説明に比して、ずっと胸に収まりがいい。勿論、人によつては反発する人がいるであろう

が。

正信偈に学ぶ問答

(二十八)

カメはカメの業報の身であり、ウサギはウサギの宿業の身を生きるしかないように、私は私の宿業の身を生きるしかない。優秀な人にあこがれても、それは私の現実にはならないし、私の貧弱さを嘆いても私はこの業報の身を離れて生きるわけにはいかない。

仏の教えによって、宿業の身であると教えられ、自分自身を変えることが出来ず、このお粗末な自分でしか生きることが出来ないことを身にしみて知らされる。

しかし、宿業の身であるという教えは、単に私の業の深くしていかんともしがたい身であることを教えるのではなく、この宿業の身に寄り添い、そそぎたもう阿弥陀仏の大慈大悲をこそ知らせて下さるのである。宿業の身において初めて、仏心大悲と感応しあうのである。

宿業の身であるが、この身を場所にお阿弥陀仏の大慈大悲のことが働いて下さる。業報の私を可愛そうだと大悲し、導き、さわりなく受け容れたまわし、浄土にいたらしめて仏になして下さる。その大悲願力が「宿業深く、どうにもならぬ

汝よ、そのままなりで我が名を称えよ。我は汝とともにいる、汝を仏にする」と南無阿弥陀仏と喚びかけて下さっている。

この大慈大悲にであうとき、嘆き嫌悪していたわが身を素直に受け容れ、「こんな私を」と大悲を喜ぶ身にして下さるのである。

これによって、あこがれと嘆きの間で宙ぶらりんにかたはたはこの場に生きてよい」と南無阿弥陀仏が私に「処を得しめて」下さるのである。

松並松五郎師が
やせがえる 負けるな一茶
これにあり

やせがえる 負けても一茶
これにあり

と替え、お念仏の大慈をお示し下さっているが、一人一人の素質や性格の良し悪しに関わらずこの上ない不可思議な恵みが与えられていて、そこにおいてこそはじめて一人一人がそれぞれの違いはあれども、この世においてそれぞれが落ち着ける「場所」が与えられるのである。そしてそこに真の平等が実現していることを感じるのである。(了)

如来所以興出世
唯説弥陀本願海
五濁悪時群生海
応信如来如実言

(書き下し文)
如来、世に興したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

(現代語訳)
釈迦如来様や諸仏方が世に出られるのは、ただ阿弥陀仏の本願の教法を説くためである。五濁の世の人々は、如来のまことの教えを信じるがよい。

*
D 「お釈迦様や諸仏方がこの世に出現されたのはただ弥陀の本願を説かんがためであり、そのほかの十二縁起だとか、空や唯識などの教説は、それは私どもを弥陀の本願にあずからしめんがための教育的手段、いわばご方便として

説かれたのであると、聖人はご自身の身において受けとめられました」
G 「なぜ十二縁起や空や唯識などの教説は方便とされたのですか」
D 「縁起や空や唯識といった深い道理は、愚かな凡夫には、多少は知性で分かっても、それを実感的にわかること、いわば身についてわかることは極めて難しいからでしょう。だからといって、それらの教説は私どもにとって無用なものではなくて、弥陀の本願へと、人を誘い養い育てるという意義があると仰せ下さるのであります」
G 「そうすると、弥陀の本願が中心であって、空や唯識という方便の教えを中心にして弥陀の本願を解釈することは、凡夫の助かる教えである真宗の本旨を逸脱してしまいかねないですね」
D 「そう思いますが、ときどきそういう逆転をしてみますので。お釈迦様は「唯このこと一つを説かんがために

お出まし下さった」、だから私たちはひとえに弥陀の本願を聞きつけなければなりません。そういうメッセーじが「唯説」という文字から伺われます」
G 「このこと一つをよくよく聞いてくれよとお勧めなのです。私たちはそれほど真剣に「弥陀の本願、ただこのこと一つを聞く」にならず、あれこれに心が向いて本願を聞くことに心が定まらない憾みがあります」
D 「ええ、ですからなかなか信心が確立しないのです。弥陀の本願を軽んじているのです」

*
G 「次に、弥陀本願海とは」
D 「弥陀の本願は一切衆生にはたらきかけ、阿弥陀仏の大慈大悲はたらきかけにより、一切衆生を導き、撰取して、浄土に至らしめて大般涅槃を成就せしめん、という広大な救済力のことです。この弥陀の本願が無量無辺のはたらきであることを海にたとえて本願海といわれるのです」
G 「弥陀の本願のはたらきはどこにはたらいているのですか。どこにも見えもしません

のこと一つを説かんがために

信心夜話

陀様のいのちがけの喚び声であり、叫びである)

《松並念仏語録に聞く》二十五

太字が松並松五郎師の言葉。

○昔を今に待ち兼ねて

より添そうみ親の叫びこそ
口に聞ゆる南無阿弥陀仏

(昔を今に待ち兼ねてとは、《弥陀成仏のこの方は今に十劫をへたまえり》のお心に感応されたものであるか。十劫の昔に私の助かる因はすべて仕上げて下さって、どうかこれをいただいでくれよ、受け取ってくれよ、助かってくれよと、喚びづめに喚び、待ち続けて下さった。その念力、願力、慈悲力が今の私に寄り添い、南無阿弥陀仏と私に叫んで下さる。邪見憍慢のゆえ、阿弥陀様を長いこと待たせ続けてきた。そういう私をあきれもせず、見放しめせず、辛抱強く、待って下さったお陰で、やっと南無阿弥陀仏は私を助けたもう大悲の親様であったかと、阿弥陀様におあいする。しかるに、阿弥陀様の方はとうの昔から寄り添いづめであり、喚びづめであった。それを私は知らなんだ。実に長い間、ご心配をおかけし続けたのである。南無阿弥陀仏が私の救い主とやっと知らせていただいた喜びは、しかしながら阿弥陀様が一番喜びたもうのである。南無阿弥陀仏は弥陀の喚び声であるが、それはまさに阿弥

○よくよく仏は業な御方

むなしく昏れゆく私を
それほど可愛か南無阿弥陀仏

(松並師の法歌の中で、一番身にこたえる歌である。《お前が助からねばこの私が助からぬのだからどうか助けさせてくれよ》と、親は子をどこまでも捨てることのできない。それが親の業、仏の業。仏は、日々むなしく人生を終わっていくしかない見る影もない私のために、身を捨てて下さる。愛される資格も、助けていただく資格もまったくない、一匹の米食い虫。そんな私にどこどこまでも寄り添い《助けるぞ、引き受けるぞ》と南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と喚びかけて下さる。《それほどにこんな私が可愛いのですか》と松並師は感泣し、底なき大悲にあきれておられる)

○命に限りのある身にて

聞くに限りのない慈
うけて蒙る南無阿弥陀仏

(死にたくない、がいのちあるもの切なる願い。しかしながら、生きたいけれども、死なねばならない。それがいのちの限りのある身の悲しみであり、嘆きである。この悲しみに同感し、浄らかな量

りなきいのちにおさめとりたもう南無阿弥陀仏の大悲。この大悲をこうむり、大悲を聞く。死んでいく肉体ばかりにしがみついていた私が、死なない弥陀のはたらきに帰入させていただくのである)

○称うるお声が活仏

喚ばれて居るとは知らなんだ
不思議々々の南無阿弥陀仏

(日ごろ称えているお念仏が阿弥陀様の声であり、喚び声であり、阿弥陀様ご自身であり、私の救い主である。その救い主が今ここに《我、汝を離れず》とお出ましく下さる。このこと一つが知らされるだけ。これが極上の功德ある不思議。この不思議にであうだけ。お念仏は称えているが、お念仏の声が生きた阿弥陀仏であるとは知らなんだ。禿頭誠師の法歌に

《朝夕に 口より出ずる 仏をば

知らで過ぎにし ことのくやしき》とある。阿弥陀様は、仏も法も知らず迷うている愚悪の私にいたい《救いたい》ために、まずはお念仏を称えさせ、称える念仏を聞かせて、念仏のお声においてついにご自身を私に開示したもう)

(了)



舞良戸 (C)SHOGAKUKAN INC.

《真宗門徒の心得》

【真宗の日常生活】

(1) 念仏。日常お念仏を称え、お念仏を耳に聞く。お念仏は仏心大悲なるゆえ。

(2) 聞法。仏のお言葉をくりかえし、聞いたり読んだりする。お寺で説法を聞いたり、聖典などを読んで、お念仏の思し召しを知る。

(3) 礼拝・勤行。阿弥陀仏を礼拝する。朝夕の勤行(おつとめ)。おつとめは正信偈なり偈文なりをお仏前で唱える。お内仏のおそうじをし、灯明をつけ、香をたく。お仏飯をお備えするなど。

【真宗の習俗】

*神仏に祈願やお願い事をしない。寺社のお札をもらって貼ったりしない。占いや《見てもらう》ことをしない。日の良し悪しや方角の良し悪しをいわない。先祖のタタリやバチという話にまどわされない。他の宗教をそしらない。

【望ましいこと】

世の平和と人々の幸せを念じ、身をつししみ、善いことをさせていただく縁あればそれを無駄にしない。

